

南 の 風 5 4 4

南部地区ミニバスケットボール連盟

会 長 藤原 敬一

オフェンスリバウンドにおけるタグアップの続きです。

オフェンスリバウンドに勝てそうであれば、ゴールの内側のポジションをとってリバウンド争いをしますが、勝てそうにないときはタグアップで相手を押し込みます。オフェンスプレーヤーが内側のポジションをとろうとすることは良い試みなのですが、気をつけなければならないのは、ディフェンスプレーヤーの内側のポジションをとってオフェンスリバウンドに備えたとしても、相手にディフェンスリバウンドを取られてしまったら、直後の攻守が切り替わった瞬間に相手のゴール側になることで、ファストブレイクで走られてしまうということです。

そのような意味で、リバウンドに勝てそうかどうかということと、ディフェンスプレーヤーよりもゴールの内側にポジションをとるかどうかの判断は難しいのです。

原則的にはオフェンスリバウンドのポジショニングは、ディフェンスの外側と考えます。ディフェンス側からしても、ボックスアウトしたオフェンスプレーヤーに背中側から押し込まれるので、リバウンドを取ってもすぐには攻めることはできません。リバウンドに勝てそうな状況で内側のポジションをとっても、自分以外の場所にリバウンドボールが飛んでいったら、すぐにディフェンスの外側になるように移動し、即効で走られないようにすることが大切です。

タグアップのメリットは、リバウンドのチャンスをうかがいながらディフェンスにリバウンドを取られたとしても、その時点でマッチアップできているので、相手のトランジションに対応できることです。ロングリバウンドでも、攻守の切り替えのマッチアップにつながりますので、しっかり相手にタグアップすることを忘れないようにします。

このようなタグアップのメリットを利用して、攻撃の終わりの段階で次のディフェンスになった瞬間に先手を取る戦術を「タグアップ戦術」といいます。タグアップ戦術は、ここでは割愛します。

▶相手のリークアウトに備える

自分のディフェンスがボックスアウトしてくるようであればタグアップして相手を押し込みます。また、フルコートで守ろうとしているチームであれば、セーフティという考え方を持たず、全員がタグアップするのもよいかもしれません。但し、シューターに対してディフェンスがコンテスト（競う、争う）をしたあと、リバウンドに入らずにそのままゴールに向かってリークアウトをするのであれば、速攻への備えとしてタグアップよりもセーフティのポジションをとることを優先します。トップにいるプレーヤーがセーフティに戻るようになりますが、場合によってはローテーションして対応することも必要になります。

(2) 攻撃から守備の局面（トランジションディフェンス）

攻撃から守備への局面とは「相手にボールを奪われたとき」の状況です。いわゆるトランジションディフェンスがこの局面にあたります。具体的にはターンオーバー、リバウンド、インバウンドの3つの場面から始まります。

次号にします